



今月は、地藏信仰に基づいて建てられた石幢について紹介します。市内には道尾石幢、川内石幢（いずれも市指定有形文化財）をはじめ、青江蔵富石幢、千怒鍛冶屋の石幢、四浦久保泊石幢、保戸島海徳寺石幢、その他、龕部や幢身（竿石）のみが残るものを含めると10基ほどが残存しています。

前にも紹介しましたが、地藏信仰の起こりは、古く平安時代中期以降、極楽浄土の信仰が盛んになり、さらに末法思想（仏法が衰えて世の中が乱れるという思想）が起こるにつれて、地藏は閻魔王の本地仏として、常に地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上といった六道を輪廻転生（りんねてんしょう・人が何度も生死を繰り返すこと。）する衆生を救い、極楽にいけるよう力を貸してくれる仏様として信じられ、広く信仰されてきました。

石幢という名前の起こりは、仏堂内にかける細長い布製の幢幡（仏様や菩薩様の象徴として飾る旗）が、六角や八角と合わせた形として石造物になって現れたと言われ、六体の地藏を刻むことから六地藏塔とも呼ばれてきました。

現在までのところ銘の例として大分県内で最も古い石幢は、大分市志都留にある630年余り前の応永3年（1396）の例で、これに続くものとしては、玖珠町、臼杵市王座にある応永33年（1426）とされ、以後天正期までの間、造塔例が急激に増えていきました。

市内の石幢もこうした中世から近世初期にかけて民間信仰と深く結びつき、火防（ひぶせ）、盗難徐、病氣平癒といった庶民のあらゆる願いをかなえてくれる仏様として信じ、建てられていったものと考えられています。以下、市内の代表的なものを紹介します。

道尾石幢 上青江道尾

文明9年（1477）の年号を記すこの石幢は市内で最も古い例として知られています。

高さ2.24m。基礎・竿石（幢身）・中台・龕部・笠（後補?）・宝珠からなる重制石幢で、四角を基調としています。

竿石に「文明九年丁酉二月四日」の年号を、龕部には六地藏像と二体の天部形を薄肉彫りで現しています。

川内石幢 上青江川内

この石幢には、昔から歯の痛む人が、自分の年の数だけ小石を供えてお参りをすればよくなるといういい伝えがあり、お参りする人が多かったと言います。

高さ2.1m、龕部には地藏像六体、十王像もしくは俱生神（閻魔王の随神）か?二体が彫出されています。笠は丸起型でその上に火焰が施された宝珠がのっています。

全体的に保存状況もよく、無銘ですが、室町時代の作と言われています。

〇問い合わせ

津久見市教育委員会 生涯学習課 地域計画担当
TEL 0972-82-9528 / FAX 0972-85-0081

蔵富石幢 上青江蔵富

この石幢は、蔵富地区を上りつめた道筋に沿って建てられており、近くには江戸時代の庚申塔が4基並んでいます。この道は白杵へと続く道で、江戸時代の絵図にも描かれています。この塔は、地域の人に「イボ取り地藏」と呼ばれ、塔のまわりには穴の開いた石が多く積まれています。以前、倒壊した際か?特に、龕部は大きく補修されています。

高さ約2.1m。無銘。室町時代終わりごろの作と推定されています。

千怒鍛冶屋の石幢 千怒鍛冶屋

江戸時代末期、他の所にあったものをこの地に移したと伝えられています。

この塔は、高さ約1.8m、八角形の基礎・竿・龕部・笠・宝珠からできています。現在は中台を亡くし、笠は大破しています。龕部には、六地藏と対角線状に十王像二体が平肉彫りで彫出されています。十王は、地獄で亡者の審判を行う裁判官のことで、地藏は、裁きを受けた人々を救うという教えに因むもので、石幢にもよくあらわれています。

現在は、風化がすすみ、苔がついているため、刻まれた地藏像の持物や十王像に姿はわかりにくくなっています。

この塔の興味深いのは、竿石の部分に「庚申」（追刻か?）と刻まれている点です。制作時期は、室町時代末もしくは若干時代が下がる時期と推定され、庚申待の供養塔のひとつとして祀られたものと思われる。

久保泊石幢 四浦久保泊

この石幢は、昔から「イボ取り地藏」として広く信仰されてきました。

高さ約1.35m。円柱の竿石には、「南閻浮提大日本國西海道豊後島津久見村／久保泊浦守庚申一後略一」と刻まれています。残念ながら、年号は確認することができていませんが、形態と銘文から室町時代と推測され、庚申塔として造立されたものと考えられています。中世に作られた石幢が庚申塔として造塔された例は県内では数例しか知られていません。

保戸島海徳寺石幢 保戸島 海徳寺

この石幢は、海徳寺本堂から墓地入口に、魚鱗塔（市指定有形文化財）に隣接して建っています。高さ1.7m余りの中型の石幢。現状は、基礎・竿石・龕部そして笠が残っています。しかし、笠は全体に比べて不釣り合いな感じがします。

龕部に現された六地藏の姿や持物、十王の隨身とされる司命・司録像も巧みに彫出されており、無銘ではありますが室町時代後期の造立と考えてよく、市内でも優れた作例のひとつです。

以上、室町時代から江戸時代の初期にかけて造立されたと考えられている石幢6基を紹介しました。部分的に残る例とあわせて研究をすすめていくとまだまだ興味深いことがわかってくると思われます。身近で親しみやすいお地藏様の信仰、まだまだ奥が深いような気がします。